

【伊藤総領事メッセージ 2020年3月】

世界的に新型コロナウイルス感染症が大流行しています。ここオンタリオ州においても、新たな感染者の発生が連日伝えられています。まずは一人一人がウイルスに感染しないように予防策を講じること的重要性は強調されすぎることはありません。石けんを使って頻りに手をよく洗うこと（「ハッピー・バースデー」の歌をやや速めに2回歌うと、推奨されている20秒間の手洗いは達成できますので試してみてください）、目・鼻・口を触らないこと、咳エチケットを心がけるとともに、十分な休息と栄養をとって免疫力を蓄えてください。また、発熱、咳、倦怠感等の症状が出た場合には、外出をせずに休むこと、オンタリオ州保健センターに連絡することにも御留意ください。感染の状況は刻々と変化していますので、当地における最新の情報を入手しつつ、自らの健康を守るために冷静で責任のある判断をするようにお願いします。

また、集団感染を防ぐために、多くの方々が集まる場所では換気の励行、人の密度の低下、近距離での会話や発声・高唱の回避、という3原則にも考慮願います。

日本政府は、1月15日に初めて国内での感染者が確認されて以降、様々な水際措置や感染拡大予防策を講じてきています。日本の「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議」からは3本柱の基本戦略の提言—クラスター（集団）の早期発見・早期対応、患者の早期診断・重症者への集中治療の充実と医療提供体制の確保、市民の行動変容—が出されました。これらを受け、大規模行事の自粛や時差出勤・テレワークの推奨、学校の休校要請などにより人々の接触の機会を減らすように取り組むとともに、国民には手洗いの徹底など感染予防のための一般的な衛生措置を広く呼びかける等の措置をとってきました。日本の医療機関の高い医療水準、地方公共団体や保健所の高度な調査力、そして日本の市民の皆様の強い協力意識の存在を背景に、これまでの（この原稿を執筆している）時点で、最新の国際的な感染状況を見てみると、日本で大規模な感染拡大が認められているとは言えません。日本国内の複数地域で、感染経路が明らかではない患者が散発的に発生し、一部地域には小規模患者クラスター（集団）が把握されていますが、死亡者数は大きく増えていません。日本の専門家会議は、限られた医療



資源の中で重症化しそうな患者を検出し、適切な治療が行われてきていることが評価されています。また、たとえばインフルエンザの症例数も例年より大きく減少しているとのことでした。

このような日本の取組に対して評価をしてくれている団体の一つが、国際オリンピック委員会（IOC）および国際パラリンピック委員会（IPC）です。



<https://www.olympic.org/news/ioc-executive-board-statement-on-the-coronavirus-covid-19-and-the-olympic-games-tokyo-2020>

今年の夏に予定されている東京オリンピック・パラリンピックが中止や延期、代替都市での開催になるのではないかと懸念する内容の報道が相次いで伝えられていますが、これらは開催決定権限のあるIOCやIPCの意見ではありません。これらの団体からは、新型コロナウイルス感染症に関する日本の対応について、「適切に対応しているという信頼感を抱いている」との評価をいただいています。実際、3月3日に開催されたIOC理事会で発出された声明の中では、「2020年7月24日から8月9日まで開催される2020

年東京大会の成功に向けてIOC理事会の完全な支持を表明する」と述べられています。

新型コロナウイルスへの対応のために、2月中旬にはIOC、IPC、東京2020組織委員会、東京都、日本政府、世界保健機関（WHO）を含むタスクフォースが組織されました。また、IOCおよび組織委員会はそれぞれタスクフォースを立ち上げており、IOCは米疾病予防管理センター（CDC）や他の国際機関との連携、また組織委員会は東京都や厚生労働省等と連携し、対応を協議してきています。

組織委員会は、最新の状況を踏まえた上で、関係機関と連携し、テスト大会の縮小や、聖火リレーにおける聖火ランナーや観客・スタッフ等への感染を防ぐための措置等、実施内容の見直しも含めて必要なあらゆる措置をとることになりますが、東京2020へのコミットメントは変わっていません。これまで東京大会の中止が議論されたことはなく、大会への準備は計画どおりに進んでいます。

3月12日、ギリシャのオリンピア市では聖火の採火式が行われました。ギリシャでも新型コロナウイルスは感染が始まっており、その拡大予防を配慮し、一般の観客の姿はありませんでしたが、無事に聖火がともされ、ギリシャ国内での聖火リレーが始まりました。3月20日にはその聖火が日本に到着し、「復興の火」として、様々な思いを胸に待ちわびている人々によって日本各地を回り始めます。また、この聖火は世界中で4年に一度のスポーツの祭典、平和の祭典を待ちわびる人々にとっても希望の灯火として映ることでしょう。



https://twitter.com/MofaJP_Sports

採火式が行われた際にも、バウハIOC会長は、7月24日から始まる2020年東京大会の成功にコミットしている旨を発言していました。日本としては、引き続きIOCや組織委員会、東京都との間で緊密に連携をとりながら、アスリートや観客にとって安心・安全な大会となるよう、そして出場する選手が最高のパフォーマンスを発揮できるように、新型コロナウイルス感染症も含め、2020年東京大会開催に向けた準備を着実に進めていく覚悟です。